る。*A. wilsonii* はこれによく似ており，今後の分類学的検討が必要である。5）分布的に見ると，黒紫色で瘤状の突起を持つ種類は主にブータン以西の東ヒマラヤ地域に分布するのに対し，半透明で刺状の突起を持つ種類は主に中国中・西部に分布する。*A. asperatum* は従来中国に固有とされてきたが，アッサムとビルマ北部にもある(Fig. 2)。

□林　一六：**植生地理学**（自然地理学講座5）269 pp. 1990. 大明堂，東京．¥3,090. 大学における植生地理学の教科書として書かれた。植物とその環境，植生調査法，世界の植物区系と群系，世界の植物群落の分布，植生遷移，日本の植生，植生史の7章からなる。本書の約半分を占める「世界の植物群落の分布」の章は，まず世界を主に地理的に区分したのち，各地域にみられる群落・植生ごとに，その位置や気候条件，植生や植物についての説明が与えられている。豊富な写真や付図と併せて，簡便な世界の植生事典にもなっている。巻末に40頁を越える文献表がある。教科書として，十分その目的達成に成功している。（三浦宏一郎）

□北村四郎：**花の研究史**（北村四郎選集Ⅳ）671 pp.，彩色口絵2，単色図版39. 1990. 保育社，大阪．¥9,500. 副題は「アジア東部の顕花植物を研究した本草学者と植物学者の伝記。」本書の内容は他に出版されたものに，書きおろしの文章を加えたもので，執筆者がこれらを調和させるために種々工夫されていることが分る。しかし方々に突出した部分があり，これがまた大変ユニークで面白いのである。初めの数章の総論というか導入部の後に，学者の年代順に主として明治期から昭和末年までの伝記が配列されている。日本を中心とし，東部アジアの関連した地域の日本人の，その他の西欧人の伝記によって植物分類学の発展が分る。著者の最も重んじる正確な事実を書いておくという心組みが感じられる。また直接に交際のあった人々に関して人間味がぢかに伝えられる。江戸時代は岩崎灌園，飯沼慾斎の大著の解説があり，明治以後ははじめは東京大学，その後は京都大学，九州大学，北海道大学関係に及び，採集家のことも少しはある。この期の外国人の伝記ではフランスの人々の活躍，Wilson, Merrill, Handel-Mazzetti などが紹介される。フランス関係は著者の得意とする所で，きわめて目新しい。「小泉先生伝」は師を中心とする京都大学研究集団の詳しい記事で，著者以外にはこのような形ではまとめられなかったものであろう。また昭和天皇に関しては数十頁を費していて，御逝去前後のあわただしいマスコミとのいきさつも書かれている。口絵にある Kiniphoph の印葉図（1761）は非常に珍らしいものの由，著者の好書家ぶりの一端がうかがえる。（津山　尚）